

つながりを意識した研修プログラムの作成について

1. つながりを意識した研修プログラムを作成するための工夫

- ・段階的に力をつけていくことが求められていることを理解できるようにする。
- ・具体的には、研修までに実務で経験を積むことや各研修で習得することについて、全体像がわかる資料を作成し、研修の中で折りに触れ提示するようにする。
- ・そのために、研修の中で重なっている要素を整理し、各研修段階で学ぶことを明確にする。
- ・実践研修と更新研修の冒頭で、それまでの研修内容や実務で行ってきたことを振り返る時間を持つ。
- ・用語の統一や共通の資料を使い、教材を作成する。

2. 重なる要素の整理（各研修の内容・視点）

要素	内容・視点		
	基礎研修	実践研修	更新研修
サービス担当者会議	・基本的な情報として、支援プロセスの中のサービス担当者会議や相談支援専門員との連携について伝える。	・サビ管・児発管としてサービス担当者会議等に参加する際の、多職種連携のための視点や留意点を理解する。	・連携の実践報告を聞くことにより、連携の中でのサビ管・児発管の役割を学ぶ。
相談支援専門員との連携	・R3まではあまり具体的に触れていなかった。R4からは講義の説明に会議の動画視聴を加えることで、イメージが持てるようにしていく予定	・支援員等として、これまでの相談支援事業所との連携を振り返る。	・サビ管・児発管として、これまでの自身の連携を振り返るとともに、連携の状況について共有することにより、自身や事業所の課題に気づく。
モニタリング	・定期的モニタリング ・達成できたところ、達成できなかったところを確認し、個別支援計画を再作成する。	・日頃から行っているアセスメントの積み重ねの重要性を理解する。 ・個別支援計画の修正の必要性に気づく。 ・モニタリングの質を高める。	

個別支援会議	・会議の種類を知る。 ・支援担当者会議を体験する。 ・進行、内容、留意点等、会議におけるサビ管・児発管の役割を学ぶ。 ・R4より支援担当者会議→個別支援会議に会議名の変更を検討	・個別支援会議前の事前会議を体験し、事業所内の状況に気づく。 ・本人の気持ちに寄り添い、意思を確認する過程を重視する。 ・会議の進行、留意点等を具体的に学ぶ。 ・助言・指導やチームづくりに重点を置く。	
職員への助言・指導、スーパービジョン		・助言・指導を適切に実施するための方法を理解する。 ・自身の事業所の業務を振り返り、職員への助言・指導のしぐみを考える。	・助言・指導の技術を学び、ロールプレイで体験することで、個人の実践力やチーム力の向上を目指す。
事例検討		・助言・指導としての位置づけで行う事例検討 ・利用者支援における事業所の課題に気づくための土壌をつくる。 ・事例検討の進め方やポイントを学ぶ。	・（持ち寄った）事例について、グループメンバーと共に状況や支援の確認を行うことにより、支援の課題に気づく。 ・事例検討会を体験することで、利用者支援の質を高める。
（自立支援）協議会		・事前課題として、自身の地域の（自立支援）協議会の活動を調べ、演習の中で情報共有する。 ・R3では、情報共有後にグループでピックアップした地域課題について深めるところまで行っただが、時間内にしっかりと深めることはできなかった。情報共有だけでもかなりの情報量になるため、この段階では情報共有までとするか検討が必要	・受講者が、サビ管・児発管として（自立支援）協議会とつながっている前提 ・関係機関の1つとして、（自立支援）協議会とどのように連携をしているか、連携ができていない場合、連携をするためにはどのような働きかけが必要と考えるか等、連携の必要性を再確認する。